

ハワイ語新聞と19世紀末の日本に関する紀行文

—D・ケアヴェアマヒと後藤医師親子—

Hawaiian language newspapers and travelogues on the late nineteenth century Japan

—D. Keaweamahi, S. Goto, and M. Goto—

古川 敏明¹

¹大妻女子大学文学部

Toshiaki Furukawa¹

¹ Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：19世紀末，日本，ハワイ先住民，ハワイ語新聞，ハンセン病，
デイヴィッド・ケアヴェアマヒ，後藤昌文，後藤昌直

Key words : Late nineteenth century, Japan, Native Hawaiian, Hawaiian language newspaper, Hansen's disease,
David Keaweamahi, Shobun Goto, Masanao Goto

抄録

本報告はハワイ語新聞に関する調査の4年目の研究成果として、19世紀末に日本に滞在していたハワイ先住民、デイヴィッド・ケアヴェアマヒによる旅行記の内容について予備的な分析を行う。ケアヴェアマヒはハンセン病治療のため来日し、日本人の医師である後藤昌文・昌直親子の治療を受けるために日本に滞在していた。滞在中にケアヴェアマヒが当時の日本を観察してハワイ語で記した旅行記は、複数のハワイ語新聞で「日本からの手紙」として掲載された。19世紀末に日本を訪れたハワイ先住民といえば、ハワイ王国のカラーカウア王が知られているが、ケアヴェアマヒのようないわば一般のハワイ先住民の日本滞在は論じられてこなかった。本稿ではこれまで注目されてこなかったハワイから日本への人の移動に光をあてる。

1. はじめに

本年度は複数年にわたる研究計画の4年目で、日本に関するハワイ語新聞記事の翻訳とデータベース構築を継続して拡充し、言説分析のための基盤を充実させることを目的としていた。

昨年度はハワイ研究及び移民研究で全く知られていない新資料として19世紀末のハワイ語新聞に掲載されていたD・ケアヴェアマヒ (D. Keaweamahi) の手紙の翻訳を進めた(総語数 5,184語)。ケアヴェアマヒはハンセン病の治療のため、ハワイ王国が統治するハワイから明治政府が統治する日本にやってきていた。滞在中に見聞きした日本の街や人々とのやりとりの様子をハワイ語で綴った手紙が「日本からの手紙」として新聞に掲載されていたのである。

本年度は Ke Alakai O Hawaii, Ko Hawaii Pae Aina,

Ka Nupepa Kuokoa の3紙に掲載された手紙の翻訳を完了した(総語数 6,407語)。ただし、Ka Nupepa Kuokoa の記事については最後の3分の1は印刷状態が悪く判読不能であった。本年度のプロジェクトにより、過去4年間に翻訳した記事の総語数は約2万語となった。

2. 先行研究

前節で言及した Ke Alakai O Hawaii (1888年11月24日), Ko Hawaii Pae Aina (1889年11月23日), Ka Nupepa Kuokoa (1896年8月28日) の3紙に掲載された手紙(記事)の見出しは全て HE LETA MAI IAPANAMA I (日本からの手紙) となっていた。これらの記事の予備的な内容分析の結果、ケアヴェアマヒの滞在中の主たる目的は、後藤昌文・昌直という日本人の医師の親子による治療を受け

ることであったことがわかった。後藤医師親子については、山口（2005）など極めて限られた先行研究があり、それらによると、19世紀末に昌文と昌直は漢方を応用したハンセン病治療で知られ、昌直はハワイ政府の招きでハワイに滞在して医療に従事していた^{[1][2]}。その後、日本に帰国するのだが、評判を聞きつけた数名の人物が日本にまで治療を受けにやってきたことがわかっている。しかし、先行研究を読む限り、記録に残る人物名の中にハワイ先住民らしき名前も、ケアヴェアマヒの名前も見当たらない。ハワイ先住民の一般人がハワイ語で当時の日本について書き記した資料もケアヴェアマヒの手紙以外にはおそらく存在しない。

3. 3つの記事

ではケアヴェアマヒが各記事でそれぞれどのような内容を記しているか見ていく。記事の検索にはPapakilo^[3]を、記事のPDF版を入手するにはHo‘olaupa‘i^[4]を利用した。

まずKe Alakai O Hawaii（1888年11月24日）では、日本の家屋の特徴、農業、食べ物、衛生、商売、軍艦、学校、医療、信仰など小見出しを設けて、自らが見聞きした内容を綴っている。医療について述べている箇所では、後藤昌直（M. Goto）に短く言及しているが、後藤医師についてよりも、日本の様々な側面、特に日本社会における外国人（haole）の存在が関心を持って伝えられている。

およそ1年後に掲載されたKo Hawaii Pae Ainaの記事（1889年11月23日）は、J. U. カヴァイヌイ（J. U. Kawainui）宛の手紙で、日本人の男が日本人の大使を爆弾で殺傷し、殺人未遂となった事件を紹介している。男の動機についても推察し、日本政府の開国に伴う諸外国との関係を快く思っていなかったようだと言っている。また、類似の事件は以前にもあったと述べていることから、ケアヴェアマヒ自身が日本に滞在する外国人として、外国人住民の立場に関心を寄せていることがうかがえる。

最後に、7年後にKa Nupepa Kuokoa（1896年8月28日）に掲載された記事を見てみよう。元々はJ. M. ポエポエ（J. M. Poepoe）宛の手紙となって

いる。ケアヴェアマヒは記事の冒頭で自分が相変わらず病気を抱えていると述べてから、天皇をめぐる事件、東北地方における津波の被害状況、北陸地方における洪水について報告している。さらに、ハワイの関係者（W. O. スミスとウッド医師）と面談し、中国からハワイへの船を介して、ハワイにハンセン病が入ってくることを防ぐための公衆衛生上の方略について話し合っている。

4. おわりに

本稿では日本滞在中のケアヴェアマヒが1888年から1896年にわたってハワイの知人たちに送った手紙の内容を概観した。この期間はハワイ王国が転覆され、ハワイ共和国が建国されるという統治機構の変遷もあった。ケアヴェアマヒが関心を寄せていたのは、主に日本人の生活様式だったり、日本社会における外国人住民たちの存在だったり多岐にわたった。また、ケアヴェアマヒは自ら病を抱える一方、アジアからハワイにハンセン病を流入させないための公衆衛生上の問題にも関心を寄せていた。今後はハワイ語新聞に加え、日本語の関連資料を探索することを通し、ケアヴェアマヒの日本滞在の実情、特に後藤医師親子との関係性に迫っていきたい。

付記

本研究は平成29年度大妻女子大学戦略的個人研究費（課題番号S2940）の助成を受けたものである。リサーチアシスタントとして翻訳を支援してくれたクーリア・ジョンソン、カハヌオラ・ソラトリオ、土肥麻衣子の3氏に感謝申し上げる。

引用文献

- [1]山口順子. 後藤昌文・昌直父子と起廃病院の事績について. ハンセン病市民学会年報. 2005, 1, p. 115-122.
- [2]The lepers of Molokai. New York Times. 1889, May 26.
- [3]Papakilo. <https://www.papakilodatabase.com/main/main.php>, (参照 2018-6-28).
- [4]Ho‘olaupa‘i. <http://nupepa.org>, (参照 2018-6-28).

(受付日：2018年6月29日，受理日：2018年7月13日)

古川 敏明（ふるかわ としあき）

現職：大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科 准教授

ハワイ大学マノア校言語学研究科博士課程修了． Ph.D. (Linguistics)

専門は社会言語学， ディスコース分析， ハワイ研究．

主な著書：ハワイ語の世界（単著， 人間生活文化研究所）． ハワイを知るための 60 章（分担執筆， 明石書店）．